五、行きかへる人の日毎に込みあふて
山の小鳥も忙しげに啼く

六、わが祖師の分け入り給ふ其頃を
今は夢路に辿る初夏の夜

七、汗ふきつ登れば山の頂きは
御法の風にいとも涼しき

八、木のかげにつと入りぬれば眞夏日も
打ち忘るごと谷川の風

九、今もなほ木の果、草の實、茸など
御山にありて昔語るも

十、此の山の月はとりわけ尊しや
雄々しき峰の上にかゝれば

十一、から木立あたり靜けき夕空に
山門いとど高く聳ゆる

十二、思ふより風もやはらし山の冬
こゝろ安かれふる里の親

雜報

研究會

講師及參聽者派遣表　（丸山顯孝記）

大正十五年度

	講師	講題	參聽者
第一回	六月五日 清水龍山師	宗學ノ振興ヲ望ム	高田惠忍師 丸山顯孝師
第二回	六月十九日 高田惠忍師	信仰ノ皈趣	泉　義敬師
第三回	九月十八日 高田惠忍師	信仰ノ皈趣（續）	永倉唯嘉師
第四回	十月二日 北尾日大師	吾宗先師ノ本尊觀	江利山義顯師
第五回	十一月二十日 河田惠量師	本門本尊實存性ニ就テ	鹽田義遜師

第六回　十二月十一日　立正大學　清水龍山師
井上惠宏師　妙戒ノ背景ト其根本精神　松木本興師

昭和二年度

第一回　一月廿九日　日蓮聖人ノ密教觀　結城瑞光師
石川海典師

第二回　三月十九日　本尊の考察　早田皓氏
望月觀厚師

第三回　五月廿日　經典ニ於ケル三時觀　清水玄正師
鹽田義遜師

第四回　六月廿日　モダンブッディストヨリノ難問答　八木友眞師
岡教邃師　丸山頴孝師

第五回　十一月一日　宗祖御着用ノ法衣ニ就テ　江利山義顯師
景山堯雄師　德富智德師

第六回　十二月三日　宗學ニ對スル一考察　永倉唯嘉師
守屋貫教師

昭和三年度

第一回　五月十二日　立正大學　淺井要麟師
傳統宗學ニ對スル懷疑　松木本興師

第二回　六月廿日　東京芝傳典院　大森禪戒師
悉曇ノ概要　結城瑞光師

第三回　七月十日　松田壽孝氏
關東御靈跡巡拜

第四回　九月廿八日　立正大學　鈴木一成師
妙戒ニ就テ　望月舜勝師

第五回　十月廿七日　立正大學　清水龍山師
宗學ニ於ケル諸問題　江利山義顯師
德富智德師

第六回　十一月廿日　立正大學　清水龍山師
宗學ニ於ケル諸問題　高田惠忍師

第七回　十二月六日　立正大學　清水龍山師
山川故日應氏著日蓮聖人實現の宗教批判會　江利山義顯師

昭和四年度

第一回　二月六日　立正大學　永倉唯嘉師
宗學ハ如何ニシテ學トシテ可能ナリヤ

第二回　五月二日　立正大學　永倉唯嘉師
前回續講

第三回　十一月廿二日　大正大學　權田雷斧師
佛教學協會挨拶　大正大學　松木本興師
所感　大正大學　望月信亨師
楞伽經ノ諸研究　大谷大學　鈴木貞太郎氏
密教ノ大樂思想　野山大學　栂尾祥雲師
成道ノ宗學的考察　駒澤大學　藤堂恭俊師

第四回　十一月廿九日　立正大學　木村泰賢師
佛教ノ研究法

第五回　十二月六日　立正大學　永倉唯嘉師

昭和五年度

第一回　七月十五日　關西地方　望月德英師
靈地巡拜

第二回　七月十五日　關西地方　松田壽孝師
靈地巡拜

第三回　十月廿三日　立正大學　常盤大乘師
支那佛教史ニ就テ　松木本興師
第四回　十月廿五日　神戸警察署　牛島鐵彌氏
生理衞生ニ關スル新研究　赤松善明師
第五回　十月廿八日　福岡市　鹽田義遜師
第三回全國佛教大會
第六回　十一月十六日　京都谷大　今村是龍師
第三回佛教學會
第七回　十二月八日　立正大學　磯野本精師
最近ニ於ケル宗學ノ見解ニ就テ　法主還化ノ爲メ缺席

同窓會々報

庶務部

本會々長は學院長杉田日布猊下をいたゞき、副會長は教頭高田惠忍先生にして、左の六名の部長と、六名の幹事を置く。即ち新部長と新幹事の氏名左の如し

庶務部長　擂田義遜先生　會計部長　丸山顯孝先生
辯論部長　松木本興先生　運動部長　野崎學穩先生
文學部長　今村是龍先生　購買部長　望月德英先生
庶務部幹事　白川忍君　會計部幹事　横山泰城君
文學部幹事　深澤海晃君　辯論部幹事　箭吹勝信君
購買部幹事　紀本孝美君　運動部幹事　濱崎智研君
助手　山田本秀君

等である。

不肖私等六名が四月二十二日を以て昭和五年度の幹事として當選したのである、依つて直ちに本年度豫算案を編成し、五月十四日午前八時より本學院階上に於て、第十九回定期同窓會大會を開催し、豫算案の承認を了し、玆に於て初めて正式に就任の挨拶を述べ前幹事より引繼を了したのである。

文學部幹事岩田堯親君入營の爲め十月末日次點者たる深澤海晃君を於て此の任に當てたのである。

六月十一日立正中學生五年級數十名、小林先生及び教官引率の許に、當身延に詣でられたので、吾等は同夜七時より大客殿に於て歡迎茶話會を開きたれば、小林先生の謝辭ありて、引率の學生は、皆聖日蓮の人格を慕ふところの者であり、小林先生も、この靈地に詣で、宗祖の人格的高風そのものゝ如き靈感のある、この棲神の地こそ、眞に、本門戒壇建立の最勝の地であると云ふ事を語られたのである。

次で當學院教授松木本興先生は、立正と、當學院とは宗門としては、鳥の双翼の如く、車の兩輪の如くなれば、互にその分に應じて一天四海皆歸妙法の理想の許に社會に勇猛突進せらるべき旨を述べて八時半盛會裡に會は閉られたのである。

七月に入り、十五日例年の如く大阪明淨高等女學校卒業生百十數名職員數名に引率され、當棲神の靈地に詣でられたので私

等は例年の如く、兩監督の御臨席を仰ぎ、大客殿に於て歡迎茶話會を催したのである。

箭吹幹事の開會の辭あり、中村監督には法花經の立脚地より觀たる女性としての進むべき道に對して御訓話あり、次で明淨校長の謝辭が終りて、一同くつろぎの中に、殊に今年は參拜學生の中より、數名富身延に詣でたる感想の一端をひれきされたが、その中に於て此の靈山身延に詣でゝ聖日蓮の人格を忍び、初めて宗教的感激の何んたるかを知ることを得た事は喜びとするところであり、又同時に、自分等が自己内省に、社會生活に物質主義と精神主義との兩面から見て、どうしても宗教の必要であると云ふ事を述べられた學生もあつたが、現代時代の尖端を走り行く都會の女性として願くは如是堅實なる内省力を有してほしいと思ふ。

最後不肖私此の機會に於て閉會の辭として日蓮主義の何たるかの一端を紹介する事の出來た事は幸甚の至りである。

十月十一日より三日間は例年の如く宗祖御入滅報恩御會式である。依つて吾が同窓會では十二日夜釋迦堂に於て活動寫眞布教を爲し、後通夜に教を爲して御鴻恩の一分に備へ奉るものである。

十月十八日午後六時より吾同窓會辯論部主催にて、第五回雄辯大會を身延公會堂に於て開催す。

男女青年團、尼ヶ崎學林、及び池上學林より辯士を招待し、此等辯士の執辯金鐵を溶すが如く、その大獅子吼、天地を震動せしむるの感あり、聽衆無量數百名盛大裡に十一時半閉會の辭あり。

十二月七日、憶吾等祖山の學徒が主師親と仰ぎ奉る院長猊下にはつひに御遷化遊ばされた。『若父在さば吾等を慈愍して能く救護せらるべし、今吾等を捨てゝ遠く佗國に喪し玉ひぬ。』顧みれば過去七ヶ年間、大正十三年御入山以來、内外の教化に意を專注せられ、寸暇ある毎に、學院に御出でになつては、修身の御講義など、爲し下され、又布教を初めとして、二百の學徒滿山の大衆を大客殿に集めては教家の進み行くべき道を說かれたのであるが、その說く所極めて實生活に重きを置き、佛戒の如きも時代化されて說かれたのである、又猊下には常に宗門を憂ふる事一方ならず、今日の宗門の不振は一般僧侶が、自己の立場を忘れて、或は社會的に職を求めて教化の事を怠り、或は政治問題等、末の問題に走つて、大聖人の御精神を忘れ、自己の立場を忘れて居るからであり、又一つには現在の寺院制度の缺點から宗門をして墮落に導く傾向があると仰せられて、『墮落してはだめだ』と非常に近代の墮落の傾向を憂はれ、又宗門の墮落を常に悲憤されたのである、故に毎朝の御勤めの砌りの御回向には必ず、

正法治國　不邪枉人民　宗門覺醒　令法久住

と聲を張りあげて申されたのである、して見れば猊下の最後の御理想は此の御回向の如く、宗風宣揚と宗門革正にあつて此の御一念より身を以て其の範を示されたものである事を私は深く信ずるものである。

宗祖六百五十年の御遠忌を目前に控へたる身延山は、今やその面目を一新して御遠忌の御法要を待つばかりに進んだ、猊下が御努力の結晶とも云ふべき佛殿納骨堂は大方竣工し、巍然として聳えて居る、而も其の足場取除けの日に御遷化されたといふことは、一層御傷しく思はれるのである、御遠忌準備事業も大方一段落と成つて、いざ御遠忌の大法要と云ふ間際の御遷化とは、いとゞ其の御苦心を思出さずには居られないのである、せめて御遠忌後まで、とは、誰しも異口同音に言ふ弔辭である、せめて御遠忌まで御存生で全國より群り集る渇仰の信者と相見え、數年御親教の緣ある全國の道俗と相會し、此の同信の人々と思通りの御遠忌を奉行して後ならば同じ愁傷哀惜の中にも慰むる邊もあつたのに、此の千歲一遇の御法會を目前に忽然と御遷化は餘りに傷しきことである。

併し承るところによれば猊下の此の事あるは既に御自身御覺悟のことであつたと仄聞する。御遠忌準備事業も稍濟んだ、これでは何時死んでも思ひ殘す所はない、併し宗祖の御冥助に依つて御遠忌を無事に終ることが出來るならば尙更心殘りはないと仰せられたと言ふことである。

如是七年間、眞に身を以て宗門の爲引いては祖山及び教家の爲犧牲的御生涯を思い續くる時萬感胸に迫り、暗涙にむせぶのみである、

願はくば日布上人、狂子の吾等を憐れみ給ひ常在靈山の彼方より、常說法教化の化用を施し給はん事を

（棲神の一角に於て白川生）

辯論部

辯論は生活の表現であり把握である、人間意識の社會化である、古來思想表現の方法として採用せられ來つたものには此の辯論と文章との二つがある。就中辯論は文章に比して直接人心に訴へ直接の効果が得られる、辯論はその効社會化の根底を流れる時代思潮と共に必然的に推移し變化するものである、如是時代の趨勢は自由豁達に自己の所信を眞劍に公明に躊躇なく發表すべきで其處に雄辯の生命が溢れて居る。陰慘より明快に不純より純正に轉換する道程は言論の力に俟つ所多大である『是佛子說法、常柔和能忍、慈悲於一切、不生懈怠心』と安樂の行に修練せる大聖の雄辯は今仍ほ人類の覺醒を强要してゐる。宗祖御入滅六百五十遠忌を迎ふる今日何と感銘の深い事ではなからうか。

文化的要求に從つて膨脹して來た辯論部が完全を期するには猶幾多の歳月を要するのは勿論である、然し今後周到の注意を拂ひ冷靜な理性の光明に照らし眞理正義の雄者として辯論練磨の覺悟があつて欲しい。夫れに今年は御遠忌準備の爲其の練磨日數の僅少なりし事は遺憾である。因に本年度の記事を略記すれば次の如し。

◇五月六日　釋尊降誕會に際し幻燈、道路布教

丸山顗孝先生、結城瑞光先生、武田海正、兵賀榮秀、瀧川顯照、八木慈文、三木淨達、矢谷智秀、最上英俊、箭吹勝信、

◇六月十七日　入山會

武田海正、近藤惠聰、貫名英雄、白川忍、矢谷智秀、箭吹勝信、松木部長

◇六月廿一日午後一時より本學院講堂に於て第一學期各級選出雄辯大會

開會の辭　白川幹事

微善の身　中一、佐々木平三郎君

精神に生きよ　中二、林善龍君

現代思潮の欠陷を斯く考ふ　中三、小浦孝勝君

反省せよ　中五、落井良昭君

佛は何處に求むべきか　高一、横山泰城君

內省生活　高二、八木慈文君

宗教的永遠の生命とは何ぞや　高三、堀內義光君

挨拶　松木部長

閉會之辭　箭吹幹事

◇六月二十日、上の山大光坊三光天子の祭典に際し乞ひにより左の諸氏を派遣す

平野龍亨、石井要宏　遠藤是孝

◇六月二十八日、立正大學主催、全國大學、高等專門學校雄辯大會に白川忍君を派遣す。

◇七月二日、東洋大學宗教科教授、杉本哲夫氏及び學生數名の講演會を後援發軫閣にて開催す。

◇十月十二日、宗祖鶴林會に際し、映畫會並に通夜說教勤修

（映畫解說）堀內義光、武田海正、太田憲教、横山泰城の諸兄

（通夜說教）武田海正、平野龍亨、石井要宏、貫名英雄、大平是孝、矢谷智秀、半澤經一、落井良昭、の諸兄

◇十月十八日、午後六時より公會堂に於て、池上學林、男女青年團第五回聯合雄辯大會を主催す。

一、開會之辭　幹事　箭吹勝信君

一、憂ふべき現代を如何にせん　本學　加藤智學君

一、若人の生命　本學林善龍君

一、隱れたる英雄　本學柳井慈要君

一、永遠の光　本學　臼井玄法君
一、人事と天命　男子青年　藤田佐門君
一、實生活と永遠者への合一　本學　矢谷智秀君
一、我祖立宗の根本精神を尋ぬて　本學　八木慈文君
一、國難を排除せよ　池上學林　遠藤要幸君
一、時局を論じ我等農村青年に訴ふ　男子青年　松田幸一君
一、現代婦人の歩むべき道　女子青年　古屋千惠子孃
一、報を越へて　本學　武田海正君
一、時局に直面して　男子青年　近藤宇佐美君
一、現代風潮を顧みて　男子青年　長畑弐君
一、幸福への道　本學　太田憲教君
一、寂光土に對する認識の相違　本學　堀内義光君
一、挨拶　辯論部長　松木本興先生
一、閉會之辭　幹事　横山泰城君

◇十月二十八日　三門祭禮　說教
武田海正、吉田孝秀、貫名英雄、石井要宏、大平是孝、横山泰城、半澤經一、落井良照、酒井泰雄、笛吹勝信、の諸兄

◇十一月二日　奥之院龍口法難會
貫名英雄、瀧川顯照、大平是孝、半澤經一、笛吹勝信

◇十一月二十三日　池上學林慧賞雄辯大會派遣

笛吹勝信

運動部

今日の所謂スポーツ！なるものは一般世人の能く認識し、且つ熱烈な聲援すら起きてゐる折、家内に青白き顔して讀書に耽り終りに神經衰弱の頭をひねくるよりか、若人は若人としての『よく學びよく遊べ』の一語を以て大いに身心の鍛練を致さねばならぬ。健全なる人民によつてのみ健全な國家は成立し、健全なる宗教家に依つてこそ堅實な宗教も理想より現實化されるのである。凡そ何事をなすにも先き立つものは健全なる身體である。矢張り筋骨逞しい黒い顔が、現代の國家にも宗門にも要求せらるゝ顔であらうと思ふ。此の意味からして大いに若人たる意氣を發揮すべきである。奬勵するを待つよりか、自發的に何處までも進取的で有つて欲しい。吾等日蓮聖人の門下生たる若人は、總てにゆきつまれる國家人民の救濟たる重大責務者である事を自覺し、宗祖滅後六百五十年の遠忌を迎ふる今日宗祖の御理想の萬分の一なりを果さうとするには、如何して纖弱な體で居られやう、須く大智德勇健でなければならぬ、獅子王の如くなればならぬ、萬難に打勝つた本化の大丈夫こそ男の中の男ではあるまいか。

吾が祖山の運動部や部員の熱勢と相俟つて日々隆盛を示せる

事は慶事なるも、從來弓術部なるもの獨り道場の不完備の爲か振はず、殊に作年等は一度も會を開くの機會なく殆ど廢頽狀態にありし爲、四月大會の折之を會則より削除するに致りし事は遺憾である。因に未だ會則には附加なく、單に後援となつてゐり卓球部は隆盛を極め、來る大會には是非共會則に附加と迄になつてゐる。

庭球部に於ける本年度は遠征の機會なく、單に校内の春秋二回の大會のみであつた事は寂しかつた。因に會員は今少し進取的參加があつて欲しい。

劍道部は一二學期共練習を執行し樣と試みたるも、部員の請ひと道場の都合等で、寒稽古の時猛練習し盛大裡に納會を擧行せんとして目下その寒稽古中なり。因に部員中にも歴々たる人よく出席し、新人を引立て練磨し勵まれる事は喜ばしき事である。尚納會には進級式も行はれ、新しき劍士を見出す事と思ふ。

終りに野崎先生及小野先生の指導には深く感謝する次第である。

（濱崎記）

文學部

宗教は信仰に根ざし、哲學は研究に基ずくが如く、文學は思索が生命である、文化の歴史的事實に於ても殆ど文章がそれを物語つてゐる。

文は時代に於ける力である。されば其處に歩一歩と偉大な文明の生産を遂げて行く事が出來る。

更に文は人格であり神秘な生靈でゐる。吾祖の御遺文を讀どいて見た時、そこに宗祖の人格の表現を見、表現し能はざる感動がある。ユーゴーの、レ、ミゼラブルも彼が當時革命人としての思想内容が窺はれ、更に佛國革命の前後の國勢、思想を物語つてゐる事が見られる。又奴隷開放の因を爲したものが、僅かに一文學書に過ぎなかつたと知れば、實に文章は偉大な力の結晶である事が知れよう。今時代は文化の急テンポの中に漂ふてゐる、一九三〇年の尖端から更に三一年への最尖端に向つてゐる。明治文壇に歡迎された、ヒューマニズム、や、イデアリズム文學は殆ど退けられて凡ゆる文學が、現實主義に其の價値を表し、そこに新生されたる文學が所謂、エロ、グロ文學である。文化を生産し改造して行く文學は遂に苦闘や、赤旗や、享樂の現實に流れて行く樣になつた。

如斯殆どその生命を忘却し、俗惡化された文化の中に吾々祖山學徒に殘された大きな任務がある。即ち祖山文學雜誌樓神の刊行によりて、宗教文學の眞生命を握み、それを如何に時代的に價値づけ思索し表現し得るか、更に濁つた都會の空氣の中の思考と、新清な靈氣の中に育つたそれとは全くその價値を異にするだろう事を示さんとするものである。殺風景なアスファ

ルトに立つ空虛な心と豐滿な大地にしつかり兩足を踏みしめた時のその氣持、それだけでも吾々は惠まれた環境にある事を喜ばなくてはならない。

吾々が机上に思ひ、山間に綠葉の香味を知れば、そこに詩興があり文章が生れ、吾々は詩人であり、文人たり得る。

一事一物それが文學に價値付け、力ずけられて初めてその生命が生きる、と云ふも過言ではなかろう。

文は偉大な力であり、永遠性を有する人格の價値的表現である。

不完全ながら幸にこゝに第十六號棲神の發行を見たるは吾等の最も大きな悅びである。只最も遺憾とするは、永年本誌の爲に御援助下されし杉田法主猊下御遷化遊され本誌の御閲讀を得ざる一事である。卽ち靈前に本誌を捧げ謹んで哀悼の意を表する次第である。

尙本誌の發行に際して前文學部幹事岩田堯親君の御盡力最も多大なりし事を附記し深く感謝する次第である。

（深　澤　記）

本學寄宿舍雜報

寄宿舍が、後には一乘の果を結ぶ峨々たる思親閣の靈峯を負ひ、前は實相眞如の月浮び無明深重の闇晴るゝ湯々たる流水を湛ふる身延川に臨み、祖師の御靈おはします御草庵に程近き西谷の高台にある、創設されてより以來早や一年の星霜を經た。

始め舍監に本山特命の學院敎授丸山顗孝師仝松田壽孝氏を戴き、更に舍生中より吉田孝秀君を舍長に、水川雅門君を副舍長に、有光友逸君を會計總務に、山野貫英君を仝助役に任じ三十三名の舍生は朝に夕に『行學の二道を勵み候べし行學絶へなば佛法はあるべからず云云』の祖訓を遵奉し一心專念に其の行に其の學に精進しつゝありしが、中途副舍長水川雅門君一身上の都合に依り職を辞して舍を去り、近藤惠聰君副舍長となり、次いで有光友逸君會計總務を辞されしを以て助役たりし山野貫英君會計總務となり新たに今村義保君仝助役となる。五年七月舍監松田壽孝氏又一身上の都合依り舍を去られるの止むなきに至りし爲め、更に後任舍監として今村是龍師を迎へるに至つた。今村舍監は溫厚篤實にして舍生は慈師の如く慕ひ、先生は恰も母が其の赤子の口に乳房をふくめるが如き慈悲を以て舍生を御指導下され、爲に舍內は和氣靄々として幸福そのものである。九月又復近藤惠聰君家庭の都合に依り副舍長を辞して一時舍を去られるを以て兵賀榮秀君を副舍長となす。續いて山野貫英君は會計總務を辞して舍を去り今村義保君又助役を辞任せし故守屋宣雄君を會計總務に、柳非慈要君を仝助役に任ず。其他は舍生三四の移動あるを見たのみである。こゝに特記すべき事は吉田舍長が自己を忘れて舍の進運の爲に努力されたことである、

卽ち舍監、副舍長合計等の辭任及び就任に際して、又舍監を補佐して或は本山との交渉に、或は舍生相互の融和に、或は舍の增設及造作に寢食を忘れて盡力以て好く舍の隆盛を謀られし吉田舍長に生等一同深く感謝して止まないのである、と同時に守屋會計の手腕と誠意も舍生一同の敬服おく能はざるところである。

現在學生室は十二室あり、創設當初より見れば、三室の增加で、學生もそれに正比例して增加し舍は一段と活氣を呈してゐる。斯く年々學生の增加を見ることなれば宏大なる寄宿舍の新築される日も最早や遠くはあるまい。舍は健全なる自治制の下に、各室に室長一名づつ置き舍生相互の學業の助成と親睦を計るを旨とする。

舍則は二十ケ條あり外に細則三四あるも、在舍生中之に違反した者は皆無である。舍生日々の行事は起床午前五時四十五分、朝勤同六時、(勤經後舍監に朝の挨拶)朝食同七時、靜肅時間午前七時三十分登校、午後二時より同四時迄に皈舍、同五時夕食同七時より九時迄勉學時間、(八時舍監に夜の挨拶)同十時睡眠とす。其他舍の內外の掃除、食堂の整理及準備等は當直を定めて常に淸潔を計るを旨とし其の完成に努めてゐる。

創設已來一星霜、湯場及び佛間等諸機關の未だ完備せざるは殘念となす所なるも、本山當局の援助と舍生の不斷の努力とによりて逐次改良に改良を加へつゝあれば、不日完備する曉を見ん。行學の二道も必竟身心の健全に待つべきもの多大なるを以て最近舍生の身心鍛練を目的として卓球部、劍道部、弓術部、角力部等の新設を見るに至り、舍生の親睦をはかつてゐる。兩舍長全舍生の熱誠にしてかつ靜寂なる努力は涙ぐましいものがある。

宗祖の御聖德の日に增して輝くと同時に吾等が寄宿舍も日進月步隆盛となり他日宗門を背負つて立つべき若冠の、舍內より二陣三陣と引續き輩出せん事を希望して脫稿す。(柳井慈要記)

在舍生は左記の通りである。

高三、吉田孝秀、兵賀榮秀、有光友逸、山上省三、高二、守屋宣雄、樋口寬正、大平是孝、高一、世古政順、江川隆治、山本隆也、片岡光乘、中五、島本慈遠、酒井泰雄、迎　貞雄、菊地溫誓、中四、今村義保、原田忠三、松井　純、石原敎溫、中三、柳井慈要、田本秀靜、馬場惠信、櫻庭是寶、端　是信、半田智福、管原　晃、江崎前奎、中二、本田半一、田島仙易、坂田惠昭、岡本文彥、淸水要昭、杉形政道、古川[illegible]悅、中野延海、中一、田中利夫、加藤智學、廣田孝存、陶山作男、松尾義弘、門田　薰、村上　淸。

昭和五年度卒業論文

當家信行論　　石井要宏

壽量顯本論　　堀內義光

當家觀心論　貫名英雄
壽量所顯本覺三身論　大田憲教
種脫一雙論　大橋潮育
本門の題目に就て　吉田孝秀
當家下種論　武田海正
當家信行論　田所英照
本尊人法論の大旨　山上省三
受持成佛論　有光友逸
當家妙行論　水川雅門
我祖の成佛論　白川榮澄
當家信行論　遠藤是孝
當家本尊人法論　兵賀榮秀
當家信心成佛論　平野龍亨

本誌發行費中に御援助下さいました左記の方々に深く感謝致します。

一金五圓也　冷泉執事長殿
一金九圓也　中村執事次長殿
一金拾五圓也　本山役課殿
一金貳拾圓也　學院教師課殿
一金拾圓也　綱脇龍妙殿
一金參圓也　藤田惠曉殿

今度の棲神發行に付いて私は自分の生活と全々かけ離れた仕事をした。それはプリンテングショップで勞働した事だ。そして其の勞働に對して自分は非常に興味を感じた。自分自身を考へた時、二重人格が現出した樣に私の心が全々變つて過去に無經驗な勞働を、心から進んでする事であつた。學友諸君と共に數日間清き生活をした事を私は非常に喜ばし〉思はれる。

（大橋麗泉）

文撰の勞、校正の煩、泣き事でなく、可成の苦痛であつたがでもそれらが大なる過誤なく終了した事は、幹事の一人として感激に耐へない。部長並に學友諸兄の獻身的な活動と、印刷所の一同の犧牲的な働きには感激せざるを得ない。或ひは自分の無經驗な拙ない力での應援が、却つて進渉を阻げはしなかつたかと慚愧を感ずる位である、とに角終りに際し關係の御一同に只々感謝する許りである。

（箭吹勝信）

不慣な棲神發行の手傳ひを初めて自分はわづに一冊のパンフレットでも漢文な勞力と活字の與へる有難さを味はつた。約二週間に亘つての私達の働きとしては、只だ文選、校正の手傳ひに過ぎなかつたけれど、今村先生、深澤兄の獻身的御努力に對し編輯の一員として感謝する。更に池上印刷所御夫婦の不眠の御勞力は頭寶をかけ離れた崇高のものと思ふ。二週間の休校は一寸ただへる、然し一字〳〵とひろひ上げる其の働き――初めて勞働の偉大さを知ることが出來た。經驗が教へてくれた『時と働』の尊さを自分のものに生かしたならばと思ふてゐる。完成に近づいた棲神を私達は祖山の前途を祝福すると同時に更により向上へと祈つて止まない。凝つと兩手をみつめる、そうして其處に完成された棲神の偉を偲ぶ。

（依田生）